

剣と

旗と

城②

旗の巻

柴田鍊三郎



けん はた しろ はた まき
剣と旗と城 旗の巻

しば た れんざろう
柴田錬三郎

© Eiko Saito 1988



講談社文庫

定価460円

1988年12月15日第1刷発行

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京(03)945-1111(大代表)

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——加藤製本株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えます。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫第一出版部あてにお願
いいたします。(庫一)

ISBN4-06-184331-1 (0)



講談社文庫

剣と旗と城

旗の巻

柴田錬三郎

目次

剣と旗と城

旗の巻

.....七

本書は一九六四年新潮社より刊行。

剣と旗と城
旗の巻

盛夏――。

一

じりじりと照りつける陽ざしの下に、山も野も、蒸されて、一箇所に火が噴けば、たちまち、一望ことごとく燃えあがってしまいそうであつた。

この暑さは、異常であつた。

目路のとどくかぎり、動くものは何もない。

「暑いな！」

旅人の口から、思わず、その声がもれた。

総髪に、着流しで、太刀を一振り佩びているだけであつた。

陽焼けた顔の中で、双眸の光が強い。五体は逞しく、しかも、颯爽としてゐる。

三年前の、気品をたたえた白皙の貴公子の容子は、どこへ消えさつたのか。

小松重成は、別人のごとく変貌していた。

三年間の、殆ど惨烈といつてもいい修業が、この若者を、戦乱の世をふみ越えて行くにふさわしい身心の所有者にしあげていた。

蒼茫数里の草原を、黙々として、炎天にさらされて歩いて来た重成は、まだ、彼方にかすむ灰色の山が、近づいたように思えなかった。

人家も、一軒も見当らぬ。

思わず、「暑い！」と、もらしたのも、わりはない。水を欲していたのである。さらに――。

一里ばかり歩いたであろうか。

一騎、後方から疾駆して来る蹄の音をきいて、重成は、立ちどまった。

――女だな。

黒髪がなびくのを視て、重成は、微笑した。

「水を持っているかも知れぬ」

呟いて、待ちうけた。

休息のいとまを与えられずに、数里を駆け通して来たのであろう、馬は、重成から両手をひろげられると、それを救いと受けとったように高いなないて、棹立った。

とたんに、馬上に伏せていた乗手が、ぐらりと、ゆれて、地上へころがり落ちた。

重成は、しずかに、歩み寄った。

仰臥したまま、氣を失った女は、まだ若かった。ただの鄙娘でないことは、顔たちでも衣裳でも判った。

帷子の上に、紅梅の腰巻をまとう公家風のいでたちであつた。

その腰巻も帷子も、そしてその下の二布も乱れて、太腿までがあらわになっていた。

肉盈ちた下肢の豊かな白さが、重成の目をまどわせた。

重成は、抱き上げると、脊活を入れて、息をふきかえさせた。

うつすらと目蓋をあけて、重成を仰いだ女は、どうしたのか、みるみる涙を湧きあげて、長い睫毛を押しあげた。

「いかがした？」

女は、すぐにこたえずに、重成を押しつけるようにして、身を起すと、茫然と虚脱したように、遠くを視やつた。

「仔細があるようだが……？」

重成は、見下して、やさしく問うた。

「……ほろびました。なにもかも——」

娘は、呟くように、云つた。

「家のことか！」

「はい。……館は焼きはられ、父も兄も切腹し、郎党たちはのこらず、討死してしまいました」

女は、両手で顔を掩おほうた。

重成は、嗚咽おとげをきいているうちに、ふっと、肚をきめた。

「ほろびた、と申しても、そなた一人だけが生き残ったわけでもあるまい。残党は、幾人か、いるのではないか？」

女は、顔から手をはなして、重成を仰いだ。

「なぜ、そのようなことを、きかれます？」

「わたしが、扶たすけてもよい、と思つたのだ」

「貴方様あなたが！」

女は、ぱつと立ち上ると、泪で濡れた褐色の瞳をかがやかした。

「貴方様は、お強いのですか？ お強そうですね？」

「べつに、自慢するほど強くはない。但し、いささか、この三年間で、軍略を修得した。それを、試してみたいと、考えた」

「お願い致します！ この通りです！」

女は、合掌して、ふし拝んでみせた。

それから、

「わたくしは、美吹みぶきと申します。……ああ、うれしい！ 天のおたすけじゃ！」

と、叫んだが、すぐに、真剣な表情になると、

「きつとですね？ きつと、わたくしを援たすけて下さいますね？」

と、念を押した。

「嘘はつかぬ。但し、わたしの力は、まだ、わたし自身が試して居らぬことを、ことわっておく」

「そんなことはいいのです。わたくしは、たったいままで、味方という味方を、みんな失ってしまいました。貴方様が、はじめて、味方になって下さいました」

美吹は、頭をふかく下げると、しばらく、顔を擡げなかった。こんどは、うれし泣きをしたのである。

ぱっと、擡げた時には、満面に笑みをうかべていた。

「お札に、さしあげたいものがあります。ちよつと、お待ち下さいませ」
そう云うや、兎のようにはねて、走り出した。

二

ひと叢の灌木のむこうへ、消えた美吹は、ほんのしばし待たせておいて、

「もう、よろしいです」

と、声をかけて来た。

重成は、なにげなく、灌木をわけて、そこを覗いたとたん、思わず、息をのんだ。

美吹は、脱いだ小袖を、ひろげて、褥にし、眩しい陽光に、白い全裸のすがたを、仰臥させ

て、目蓋を閉じていたのである。

重成は、生れてはじめて、白昼の明るい世界で、美しい女体を、視せられたのであった。ふつくと盛りあがった胸の隆起の頂きに、小さな木の実のようについている乳首や、それまで帯をきつく締められていた腹の痕や、下腹にわずかな茂みをつくっている黒い下生や、そして、のびのびとまっすぐに発達した脚など――、若い肢体のそれぞれの箇所が、重成の眼裏に、永くのこる強い印象をくれた。

重成は、一瞬の驚愕がすぎると、

「そなたの礼、というのは、それか」

と、烈しい語気で、云った。

「ほかに、さしあげるものとても、ありませぬゆえ……」

なんのはじらいもなく、美吹は、こたえた。

「着物をまとえ！ 莫迦っ！」

叱りつけておいて、重成は、灌木のこちら側へしりぞいた。

もとのすがたになって、現れた美吹は、怯ず怯ずと、重成を視やった。

なぜ、慍^{むさ}られたのか、納得のいかない面持であった。

女として、大切な操を与える、ということ以上の、贈りものがあるのか。それを拒んだ男の心が、美吹には、全く判らないようであった。

重成は、慍然とした態度で、歩き出した。

「あの……」

美吹は、いそいで追いつき、肩をならべると、重成の顔を、覗き込んだ。

「わたくしを、さげすんでおいでなさいますか？」

「さげすんでは居らぬ。しかし、男の力を借りるためには、からだを呉れる、ということ、すこしも疑って居らぬそなたは、まちがって居る！」

「はい——」

「女の操というものは、男子の信義と同じくらい、大切だとは思わぬか？」

「……………」

重成は、美吹が俯うつむいたので、視線をくれた。

美吹の横顔には、一瞬、みにくいほどの暗い翳かげが刷はかれた。

「どうした？ わたしの云うことが、不服か？」

「いえ——。母のことを思い出して居ります」

「母？ そなたの母者が、どうした？」

「十年前にも、わたくしの家は、滅亡の寸前まで追いつめられました。その危機を救ったのは、母でございました」

「……………」

「その時、館は、十重二十重に、敵勢に包囲されて居りました。……父は、敵の大將に、母を贈ったのでございます。母は、この世に、並びもないほどの美しい人でありましたので……」

「そなたの父上は、妻よりも家の方が大切であつたのか？」

「武士ならば、そうするのが、当然だと存じます」

「わたしなら、妻を敵に渡すかわりに、討死するだろう」

美吹は、この言葉をきいて、怪訝けげんそうに、重成を視やった。

「家よりも、女の操の方が、大切だと仰言るのですか？」

「場合によつては、そう考へてもよいではないか。……もし、かりに、わたしが、そなたを、生涯唯一無二の女性として、愛したとする。その時、わたしが、天子の位か、そなたか、いずれかをえらべ、と云われたならば、わたしは、そなたをえらぶだろう」

「……………」

美吹は、大きく目を睜みはり、息をのんでいたが、不意に、

「貴方様のようなお方に、お力をお借りすることはできません！」

きっぱりと、云つた。

「なぜだ？ わたしには、勇猛の志がない、とみたのか？」

「武士である貴方様が、どうしてそのようなお考えをお持ちなのか——信じられませぬ」

「美吹——と云つたな？」

「はい」

「わたしは、おのれ自身の力を試したいために、そなたに力を貸すのだ。そなたを愛したのではない」

そう云いはなつておいて、重成は、草をたべている馬に近づくや、ひらりとうち跨り、

「さ——」
と、美吹へ、手をさしのべた。

美吹をうしろへ乗せるや、

「どちらだ、東か西か？」

と、問うた。

「あちらです」

美吹は、東南の方角を指さした。

重成は、馬腹を蹴った。

三

鯨波と太鼓と法螺の音が、東と西の山裾で、殆ど同時に、起った。

「やるぞ！ やるぞ！」

銀太郎は、巨きな松の高枝にまたがって、叫んだ。

松は、ちょうど、この平原の中央に位置する小丘陵の頂きにあった。

三年のあいだに、銀太郎もまた、見ちがえるほど、成長していた。といつても、まだ、若者と称すには、なお三年ばかり待たなければなるまいが……。